# 文芸研ニュース

２０１９年５月１８日
—NO．１５０—
発行　文芸教育研究協議会
編集　文 芸 研 事 務 局

目　次

巻頭　上西委員長より・・・・・・・・・・・・・1
唐津文芸研（国語の教室）・・・・・・・・・6
青年学校便り・・・・・・・・・・・・・・・・7
事務局通信・・・・・・・・・・・・・・・・・8

枚方から唐津に文芸の鬼来たる！

# 「どうして文学作品を読むの？」にどう答えるか

上西信夫（文芸教育研究協議会委員長）

## ■二つの研究会から

「どうして文学作品を読むの？」——今年二月「先生とたまごのがっこ」（略称「センたまネット」／青年教師と教職をめざす大学生の会）が東京であり講師を務めた。国語分科会で与えられたテーマが「どうして文学作品を読むの？」であった。「センたまネット」実行委員会メンバーの問題意識がおおよそ理解できる。操作・適応型言語能力＝国語力であり、全国一斉学力テストを通してそれへのシフト・強要が進んでいる現状への批判的検討を深めたいということであろう。学生の中には文学部の学生もおり、昨今の人文科学の縮小・再編を目の当たりにして、文学をなぜ学ぶのかという根源的な問いに向き合っている参加者もいた。現職の青年教師にとっては、単貫言・ＡＬ、「主体的・対話的で深い学び」「見方・考え方」「資質・能力」とめまぐるしく変わる国語の教科内容・方法・構造変化の嵐の中で、国語は何をする教科かというこれまた根源的な問いを突きつけられている。「どうして文学作品を読むの？」のテーマは以上の問題を内包している。

今年一月神奈川県小田原市にある私学・旭丘高校の全学教

育研究集会へ共同研究者として参加した。いわゆる進学校ではないが憲法・四七年教育基本法・子どもの権利条約を学校経営の指針とした生徒・保護者・教職員が対等平等の関係で教育課程・授業づくりを行う稀代な高校である。文芸研でも招聘した堀尾輝久氏（教育学・東大名誉教授）や植田健夫氏（教育課程・名古屋大）、三輪定宣氏（教育条件・千葉大名誉教授）らが賛助会員として旭丘高校の教育を理論的に支えている。この研究会の中でも、改訂高校学習指導要領・国語の問題点と文芸（学）教育の現在的意義について話す機会があった。（以下の内容は「改訂高等学校学習指導要領批判検討・職場討議資料・全教編」を引用・参照した。）

今年度から本格実施の改訂高校学習指導要領・国語の問題点を端的に指摘すると、

①実社会・実用性の過度の強調

②教育課程編成の困難さ

③「ことば」の芸術性の軽視

④個人の発達を期する教育から「我が国の言語文化の担い手」を育成する国語教育へ　と改訂学習指導要領全体に関わる問題が国語に象徴的に表れている。

①は小学校・中学校の実生活に役立つ実用国語・プレゼン社会を生き抜く「活用力」重視の延長線上にある。（実用主義言語観）④は「伝国」領域の登場と呼応し、教育の目的を個人の人格の発達より、日本語及び日本文化の優位性、国家の担い手として―人材ととらえる国家主義的な言語観、先の実用主義言語観と国家主義言語観がグロテスクに接続している。

②については義務制の教員には馴染みがないが、高校独自の教科構造の問題である。従来の「国語総合（現代文・古典・表現）」が「現代の国語」と「言語文化」に分かれ、「現代の国語」は実用的な情報の扱い方、伝えるための表現の役割、場に応じた議論の仕方、文章の整え方や工夫など実用性・論理性に重きを置く。「言語文化」は古典の学習を含めた「我が国の言語文化への理解を深める」ことが強調されている。「現代の国語」と「言語文化」の必修科目に加え、今回の改訂では「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」の四科目が置かれる。従来の「現代文Ｂ」（四単位）では評論・随筆・小説・韻文など多様な文章をバランスよく学ぶことが可能であった。しかし、今回の改訂では事実上「論理国語」と「文学国語」に細分化され、単位数との関係（各四単位）で全体のカリキュラムを圧迫することは明白である。結果苦肉の策として大学受験を意識した教育課程を組む学校では「論理国語」を、進路多様校では「文学国語」を選択することが予想され、育成される国語力に偏りが出ることが危惧される。

②とリンクして③の「ことば」の芸術性の軽視が、文芸研と直接かかわる問題点であり、冒頭の「センたま」実行委員の問題意識―「どうして文学作品を読むの？」と関わってくる。

## ■変革主体を育てる国語教育

文芸研は教育の目的を〈自己と自己をとりまく世界をよりよく変革する主体に育てる〉革新的営みとし、国語教育の目的を〈ことばで人間の真実やものごとの本質・法則・真理・

価値・意味を認識し、表現する力を育てる〉と規定している。今、〈変革主体〉に育てることの意味は極めて大事な視点である。先に改訂高校学習指導要領・国語を「実用主義言語観と国家主義言語観がグロテスクに接続している」言語観ということを引用・言及したが、実用主義的言語観とは換言すれば競争社会を生き抜く新自由主義的言語観ということである。佐貫は「世界の意味を競争とナショナリズムによって描き出し、グローバル資本の強大な世界資本の構想に一体化して『活躍』する能動性を一方的な価値意識の教育（競争社会への同化、国家主義的あるいは覇権主義的な歴史意識の形成、道徳規範の押し付けなどによって）によって呼び覚まし、学力を活性化し、応用力や創造力を生み出そうとするもの」であり、その結果学力と人格の乖離が問題となっていると指摘し、「これらに対して、学力と人格の結合を人間の尊厳を回復する方向で組織する教育実践が不可欠になっている。」という。そのキーワードが〈変革主体〉である。「人類は抵抗の主体―よりよく生きようとする人間の『命』に立ちはだかる障害としての自然や社会の矛盾とのたたかい―を通して、文化的歴史的変革に向かう主体性を再構築し続けてきた。この変革主体性の実現への欲求は、現代における人間の根源的な能動性を構成する人間的本質として人格の中に組み込まれている」（佐貫浩　法政大名誉教授　「学力と人格を結びつける」『クレスコ』2018.年 11 月号）　文芸研が掲げる〈認識と表現の力を育てる国語教育〉は、子ども・生徒を〈変革主体〉に育てるためであり、文芸を文芸として読む―《たしかめよみ》の切実な共体験の成立と、《まとめよみ》の主題・思想をつかみ、典型をめざす読みも、《ものの見方・考え方》も、すべて人間的な感性と深い認識力を育てること、〈変革主体〉に育てることに収斂する。国語科教育の本流―学力（ことば・表現、美と真実、ものの見方・考え方）と人格形成の統一をめざして、私たちは同志として歩みたい。

## ■相補的世界観

囲碁や将棋の世界でＡＩ（人工知能）と人間の対決が注目を集めているだけでなく、ＡＩが俳句を「創作」し、その完成度が話題となっている。ＡＩが発達する中で大学がなすべき「学び」とは何か。新たな時代における人文教育のあり方を議論した第一四回朝日教育会議があった。「シンギュラリティー」＊という概念はその文脈で語られる。福岡はシンギュラリティーは起こらないという立場で興味深い発言をしている。長くなるが一部を引用する。（福岡伸一:生物学者・青山学院大学教授／朝日教育会議での基調講演 2018.12.15　青山学院大学／2019.1.18 朝日新聞東京本社版記事）

「…生きていくために、私たちは食べ続けなければなりません。食べた物の粒子は胎内に散らばり、体の一部になります。この時、同時に別のプロセスが起こっています。それは、体を形づくっていた粒子が代わりに抜け出し外に捨てられること。つまり「食べる」ことで自分自身の体を入れ替えているのです。体は常に壊され、つくり替えられる。昨日の私は今日の私ではない。一年前ともなれば生物的には別人なのです。

…生命とは何か。私は『動的平衡にある状態』だと思いま

す。動的平衡とは、つくることよりも壊すことを優先する。壊さないとつくれない。壊すことによって生じる不安定さを利用してつくり直す。この時同時に絶え間なくエントロピー（乱雑さ・無秩序）が捨て続けられているのです。（つくり替えは完璧にはできず、酸化物やゴミが残ります。徐々に蓄積され、生命はエントロピー増大の法則に完全に打ち勝つことができません。だから我々には寿命があるのです。）変わらないために変わり続ける、禅問答のようですが、大きく変わってしまわないために、絶えず小さく変わり続けるのが生命体。絶え間ない均衡の上で成り立っている状態、現象としての生命がある。だからこそ生命は柔軟で、可変的で、病気やケガでも新しい平衡状態を作り出せるものなのです。

分解と合成という相反する行為を同時に実行する動的平衡の生命観は、ＡＩに理解できるでしょうか。（西郷先生なら「好きだけど嫌い」という男女の仲に譬えたかもしれません）私はなかなか理解できないだろうと考えています。『ＡＩ的』な見方は『機械論的な見方』です。パラパラ漫画のように時間を分解してつなぎ、物事の動きを見ています。『人間』を深く理解しようと学問である『人文知』はそうではない。パラパラ漫画になっているＡＩ的な見方でなく、自然に対する本来の見方を取り戻す学問の働きです。『動的平衡』の見方も『人間の知性だけができる見方』なのです。」「パラパラ漫画になっているＡＩ的な見方ではなく」とは、還元論的な見方ではなく「動的平衡」のような相関的・相補的な見方ということである。

西郷先生が晩年、西郷文芸学は二元論ではなく、相関的・相補的世界観に基づいていることを力説し、福岡伸一氏の著書を紹介し、西郷文芸学理論との相似性に言及し、高く評価した所以である。そもそも視点論から導かれる同化体験・異化体験のないまぜとなった共体験論、表現論としての情景描写の主観（視点）と客観（対象）の相関関係、美の客観主義・主観主義でもない相関説、現実と非現実のあわいに成り立つファンタジー論、複合形象論（人物論）、自在に相変移する入子型重層構造（西郷模式図）の双方向の矢印（⇅）も…すべて西郷文芸学理論は相関的・相補的原理にもとづいている。（東洋の世界観である「二而不二」―二にして二にあらず。主体と客体は別個の「二」ではあるが、しかし認識・表現においては「相関・相補」的、つまり不二であり「一如」であるという考え方）

＊シンギュラリティ―：ＡＩ（人工知能）が人間の知性を超え、世界を根底から変えてしまう転換点をいう。ＡＩの将来を考えるときの重要なキーワードで、人工知能が爆発的な進化を遂げ、「人間がＡＩに支配される」といった形で現在とは全く違う世界が出現することが想定される。

## ■「どうして文学作品を読むの？」か

二月に逝去したドナルド・キーン氏は、本に親しんできた日本人が、テレビやゲームに興じ、古典と向き合う時間をなくしてしまっている風潮を惜しんでいた。（テレビやゲームの）「ファーストフード」から得られる喜びには限りがあると指摘し、人間性の探究に駆り立てる文学が再び必要とされるかもしれないと書いた。近年は、現在の私たちに通じる孤

独や自信と不安が背中合わせの矛盾を描いているとして、啄木の作品を評価し勧めていた。（「朝日新聞」社説　2019.2.26）

豊かな文化の中に可能性があると説いたキーン氏のことばを具体的に引き取ったのが、西郷先生の『啄木名歌の美学』（黎明書房 2012）である。〈歌として詠み、詩として読む三行書き形式の文芸学的考察〉の副題に明記されているように、啄木の名歌を相補的に詠む・読むことによる美的体験の成立と独自な三行詩の構成（文体）に秩序立てられことによる虚構の小宇宙。文芸作品の構成・文体（形式）と主題・思想、視点の移動（構成）と文芸体験…と、西郷先生は文芸教育の可能性を指し示してくれている。

二〇一六年来文部科学省が、人文科学の縮小・再編の方針を出したことは、文芸教育と無関係ではない。新自由主義・グローバル市場での競争力をつけるため、短期的な利益追求の要請のもと、その最大の犠牲は芸術と人文科学の領域である。人間性を主題とするような学問諸分野（芸術と人文科学）は大学運営におけるお荷物とされ、無用の長物と見なされている。アメリカの例では、規模の縮小・研究スタッフの削減、最終的には部門の廃止がおこなわれている。「長く文学や哲学は、世界を読み解き変えてきたのに、国益を追求するあまりデモクラシーの存続に必要な技能を放棄している―静かな危機に注目せよ」とヌスバウムは警告する。（『経済成長がすべてか―デモクラシーが人文学を必要とする理由』・岩波書店　2013）人間とは何か―を追究する芸術・人文科学を学ぶ者は、その過程で他者のおかれている状況を想像することを身につける。それはデモクラシーの繁栄には不可欠な能力、「内なる目」（批判的思考力と想像力）を育てることに他ならない。（文芸研第五三回横浜大会基調提案　上西　2018）

文芸作品の正しい理解ができるというだけでなく、それらの中にある善なるもの、美なるもの、すばらしいものを発見し、それを限りなく愛することができる子どもを育てること。また、不正や悪、醜いものや愚かなものについて憎み、怒り、嘲笑うことのできる子どもに育てる。文芸は、「思考と感情に同時に強くはたらきかける（ゴーリキー）もの」であり、まさに人間学なのである。

文芸教育は作品世界に呼吸し、作中人物とともに生きることをとおして、さまざまな状況の中を矛盾をはらんで生きる人間の生き方を考えさせる。その中で自己と状況を、よりよくつくり変えていく意思と能力を持った人間（変革主体）に育てることをめざす。高いヒューマニズムに貫かれた文芸は、人間への夢と人間のあらゆる敵に対する怒りに満ちている。文芸の感動を通して、子どもたちに愛すべきものをひたむきに愛し、憎むべきものをあくまでも憎むことができる、また人間の喜びや悲しみ、苦しみ悩み、生きがいというものがわかる豊かな感情と強い意志を育てたいと思う。（文芸研第五三回横浜大会基調提案　上西　2018）

# 唐津文芸研（国語の教室）

## 文芸研の学習会の感想　唐津文芸研・川口芹奈

文芸研の学習会を佐賀県の唐津市で開いていただけたことに、とても感謝でいっぱいです。一昨年、同学年を組んでいた中島陽子先生との出会いが、文芸研との出会いでした。読み深めること・わかることが、これほど楽しいものだということに感動しました。文芸研で学んである先生方の授業は、子どもたちがのびのびと考え、自分の思いを精一杯伝え、友達の考えを聞きながらさらに深まっていく本当の深い学びだと感じました。神戸・神奈川での全国大会に参加させていただき、たくさんの先生が研究している姿がとても素敵でした。

唐津の学習会では、野澤先生に来ていただき２９名の先生方と学習をしました。唐津を中心に昔文芸研を学んでいた先生方や、初めて文芸研を知った２０代の先生など、幅広い世代での学習会になりました。

午前の「モチモチの木」の学習会では、豆太の人物像をどう読むかというところから学習が始まりました。初めは、文章に書いてある通り、豆太は臆病という読みが多かったですが、本当に５つでせっちんに行くことができないのは、臆病なのかという議論になりました。その話し合いをしていく中で、人物像を考える時に、主人公の置かれている状況を抑えて「考える」ということが大切なのだとわかりました。「海の命」の講義では、太一が瀬の主と出会い、クエにもりを刺すか葛藤する場面では、初めはクエを取らなかったのはクエとおとうを重ねたためだと考えていましたが、他の先生方の考えを聞き、おとうの死を乗り越え与吉じいさの考えに学んだ太一だからこそ、様々なつながりの中に生きる大魚を海の命だと考え、殺さずにすんだのだと納得することができました。文芸がわかる楽しさを、この講座で学ぶことができました。

詩の授業では、「竹」という作品を読んだ説明が一番心に残りました。詩をまずは読み、目で見て声に出してわかる違いから着目し、連ごとの言葉の違い、そして、その意味を読み取り、最後に自分が題名をつけるとしたらという問いが、その人それぞれの考え方を表していてとても面白かったです。

今回の学習会では、具体的な教材を使いながら理論をわかりやすく説明していただきました。今まで感覚だったものが、確かな理論でわかることがとても面白く、さらに学んでみたいと思いました。深い学びができる授業をするためには、まず、私自身が学ぶ必要があると感じました。

# 青年学校だより（一月開催）

豊中サークル　山本千恵子

若い頃、国語の系統指導という西郷先生の提起を知った時は衝撃でした。でも時折読む書物や文芸研の大会に行ってもその教材ではなるほどと思うことはあっても、正直わからないことが多かったです。

青年学校の存在は知っていたのですが、当時は時間も費用もハードルが高く、関心はあったのですが参加にまで踏み切れませんでした。

京都大会に娘と参加した時に、青年学校のお誘いを受け、自分がやれなかったので、娘には若いうちに学べばきっと得るものがあると強く勧めました。

１４期に参加した娘の資料や話から内容が素晴らしいことを改めて感じました。退職し講師生活でしたが、思いがあれば青年学校に年齢制限はないと聞き、１５期から入れてもらいました。やっと積年の夢が叶いました。

一月に１６期第五回学習会がありました。初日は、野澤先生から文芸学について教わりました。たくさんの絵本や六年生の説明文を使いながら、認識の内容や小学校高学年で学習したいものの見方・考え方について学びました。グループ討論で、教材の認識内容を話し合うのは、自分が主体的に考えられて良かったです。後で野澤先生からの講義により、さらに深く考えることができました。

二日目は、松田先生に「海の命」の教材分析や授業の実際を話していただきました。学級経営と国語の授業が行きかう素晴らしい実践に触れ、多くのことを学ぶことができました。

「教材を教える」のではなく「教材で教える」とよく言われます。でも、なかなか現実はそうはなっていないことが多いです。これまで我流で教材研究する際は、一語一語や文にこだわったり、展開を考えたりして深く分析しようとはしていたけれど、その教材自体に終始していました。子どもにどんな力を育てたいのかがあいまいであったり、系統性が押さえられていないと、文の難易度で教材を見てしまうことがあったり往々にします。国語の力が算数のようにはっきり目に見えなくてわかりづらいこともあってかと思います。それだけに国語の授業の差は大きいと思います。

青年学校は学年や教材、ジャンルを絞る大会と違って、たくさんの教材を通して、ものの見方・考え方、認識の方法を学べます。本だけでは学べない多くのことをたくさんの教材を示していただいて具体的に学べました。西郷文芸学の基礎から始めて系統的に集中して学ぶことができます。本当に中身の濃い学習です。

一期二年間で一通り学べますが、二期目は一通り学んだ上で再度あいまいな所を深められるので、二期学ぶのがお勧めです。

私は学び始めが遅かったので実践に活かせる期間が短かったのが残念でした。是非若い人や今文芸研に関心を持っている方はまず青年学校で集中的に西郷文芸学を学んでほしいと思います。

# 事務局通信

★第５４回かごしま大会に向けて、鹿児島・九州ブロックの皆さんは、準備にお忙しいことと思います。今年度は、インターハイと日程が重なってることもあり宿泊施設をはじめ早めの申し込みをしていく必要があります。すでに第１次チラシもでき、ホームページでは申し込みも始まっています。また各地での国語の教室、情宣活動も始まっています。この実践研で提案レポートをしっかりと討議し、大会の成功に向けて力を合わせて取り組んでいきましょう。

★文芸教育誌と授業シリーズなど、書籍の宣伝、販売、学習をお願いします。文芸研では、編集委員会を中心に、文芸研が積み重ねてきた理論と実践をより読者にわかりやすいもの、今に求められているものという観点で全サークル員のご協力をいただいて作り上げています。サークル活動で、国語の教室で、日常でなど様々な機会をとらえて運動を広げていきましょう。日々の小さな積み重ねが仲間を作っていきます。皆様のお力添えをよろしくお願いします。

★年会費（一人四０００円）は遅くとも全国大会には納めていただくようお願いします。

気付けば、文芸研ニュースも150号という一つの節目まで来ました。132号から松山が編集長として勤めて数年。それまで、諸先輩方がサークル運動を広げ、深め、勇気づけてきてくださいました。

上西委員長によると、1976年から始まり、初代編集長・亀島喜久子さん（東京・大きなかぶの会）、続いて芦谷牧人さん（千葉かぶの会）、辻恵子さん（千葉）、吉田緑さん（福岡）、寺村記久子さん（兵庫）、藤崎豊さん（高知）、田原伸夫さん（広島）、京子さん（岡山）、野澤正美さん（大阪）、山中吾郎さん（山口）と、続いてきたそうです。150号を記念して、歴代の編集長の中から、ニュース原稿を書いていただこうと考えています。楽しみにしていてください。

☆文芸研今後の予定

※第五十四会文芸研かごしま大会
（鹿児島県民交流センター・津曲学園鹿児島高等学校）
八月四日（日）・五日（月）

※冬の実践研（神戸）十二月二十六（木）・二十七日（金）